

富士川游先生、私への教え、思い出

三木 栄

富士川游先生（一八六五—一九四〇）が御他界なされて五十年、先生は日本医史学の生みの親、育ての親である。私（一九〇三）にとつては、医史学勉強の取上婆、育ての親であり、お亡くなりになられてからも、これは引き続き今に及んでいるのである。

私は九大医学生の時、富士川先生の毎年出向医学史講義を受けた。大正の末に日本医史学会が正式学会になった頃入会した。昭和三年春、隣邦の京城大学内科へ赴任した。当時、東亜文化圏の懸橋であり数千年来独自の文化を持つ此の国に、医学の面ではその史的研究は皆無に近かった。よって私はこれを明らかにしようといふ決意、職務の全余暇を利用して、半島の国史・文化・地理・社会構成などの知見に先ず手を着けつつ、医史料、医書の収集披見に力め、此の国の諸図書館を尋ね、法文学部や在野の有識学者からも親しく教えを受けた。かくして学会機関誌『中外医事新報』に毎月「朝鮮医籍考」と題し連載した。

昭和四年頃東上し医史学会に列席した時、富士川先生に別室で親しく拝眉し得た。私は今朝鮮の医学史を勉強中ですと教えを乞うた。先生は温容、それは可、暫くして自分の収集した資料中にも朝鮮本があったようだ、今これは挙げて京都大学へ寄贈してあるとし、図書館の山鹿誠之助司書に紹介状を認めて下さった。かくて図書館の一室に荒紐で括られ山積してあった未整理の万余の書物（これは正しく整理、後年『富士川本目録』として刊行される）から、書誌学者山鹿先生は、朝鮮医書類を次から次へと引き出された。私は二、三日宿泊し悉皆見せて頂いた。これが緒口となりその後、毎年医

学会出席などの機を利用し、東京では宮内省図書寮・内閣文庫・東洋文庫（ここでは田川孝三大兄から恩恵を受く）・上野図書館・東大図書館・誠嘉堂文庫、名古屋の逢左文庫、大阪の武田杏雨書屋（私が収集した朝鮮医学図書類は、後年総てここに納む）、大阪府立図書館、九大図書館、長崎図書館等々、また足を延ばし奉天医科大学東亜医学研究所（ここでは岡西為人大兄の世話になる）、大連図書館、北京国立図書館等々を歴訪調査した。西域や西洋諸国のものも東洋文庫を介して不十分ながら調べることができた。以上の書誌学的業績は、終戦後纏められて『朝鮮医学誌』と大成刊行されるが、これが基礎知識となり、主書の『朝鮮医学史・疾病史』（両史とも再刊）並びに『医事年表』を完成せしめたのである。

翻って富士川先生は『医学史』（明治三十七年成る）や『疾病史』の大成後、終身医人道義学——医の倫理宗教の問題に考えを傾け、これは主書『医学史』でも強調されていたが、この分野に於て沢山の名著（『医箴』など）を出され、更に後年、医学普及のため『日本医学史綱要』を著され、また『世界医学史』についても筆を染められた。

（以上の記は凡そ戦前、以下は戦後）

時勢の変転の致すところ、差異は勿論あるが、先生の学問の道に私は沿うたように感じられる。昭和三十年から朝鮮の医史の研究が一段落したので、以後、学を西へ西へと延ばし中国は勿論、西域・インド・中近東・エジプト・ギリシア・西欧諸国・アフリカ・北米・南米へ転々と進め、それは疎であるが世界の一つにしての医史料を求め、阿知波五郎大兄の援助の下、昭和四十七年に『体系世界医学史』（書誌的研究）、次いで『人類医学年表』をも編み刊行した。これと平行し「医学は一つ、世界は一つ」の理念の下で、医の倫理史の面に進み数々の著を刊出し、厚顔しくも「医師の誓詞十条」をも発表した。尚又、生のある限りと今に至るも雑筆小論を時々発表している。

因に不才私の医史勉強の一生は、富士川先生が辿られた途に従い歩んだと思われてならない。然り、先生は私の六十余年間の学びの道に於て、出発点で決意を与えられ、その後も自覚がないまま後を追う一生の途を送らしめたと思われる。先生は私の誠の師である。深奥な学恩を偲んで止まない。生は短し、学は長し。（一九九〇年九月記）（日本医史学会名誉会員）